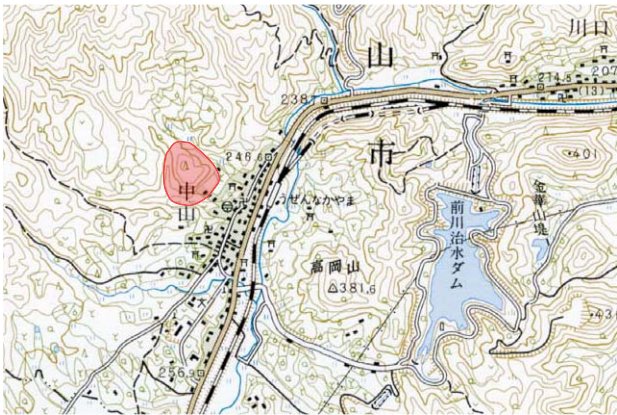


中山城跡（第 2 次）発掘調査説明資料

2006 年 10 月 27 日（金）
財団法人山形県埋蔵文化財センター

中山城跡（2 次） 調査要項

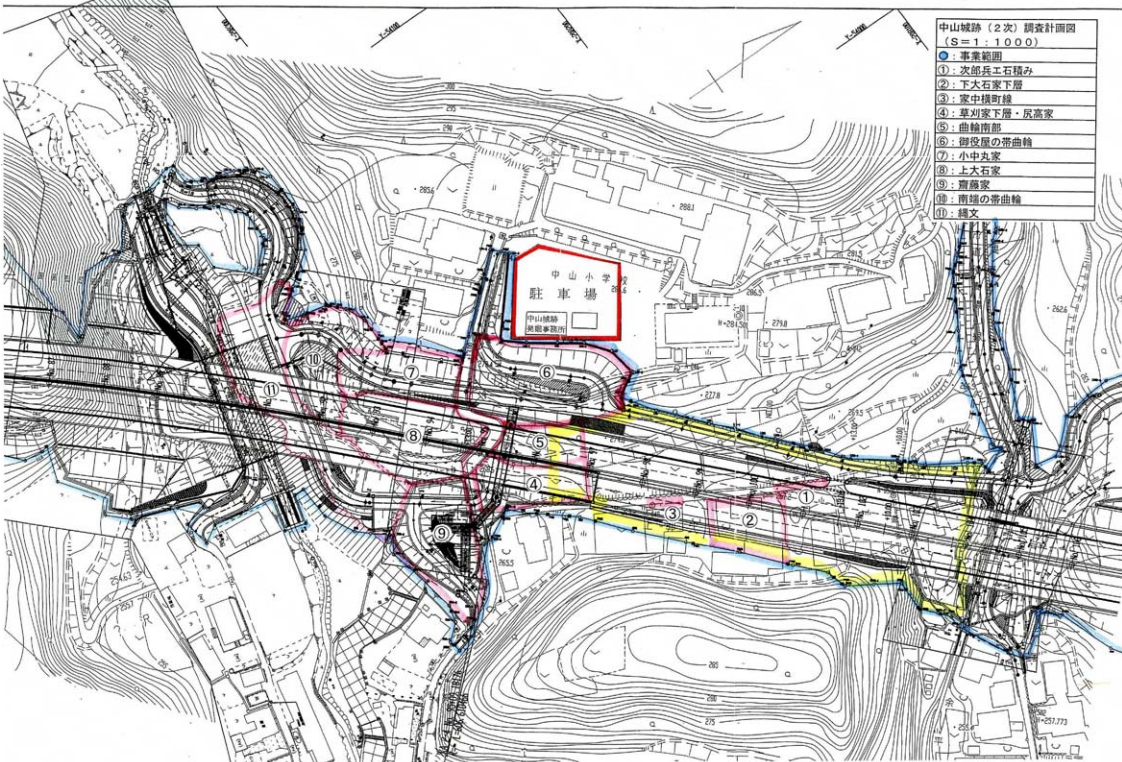
遺跡名	中山城跡（なかやまじょうあと）
所在地	山形県上市市中山字上郭式
遺跡番号	平成 7 年度登録 登録番号 207-001
遺跡種別	城館跡、散布地
時 代	縄文、平安、中世、近世
遺 構	曲輪跡、武家屋敷跡、武家屋敷石積、掘立柱建物跡、礎石建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、墓跡
遺 物	近世陶磁器、石製品（砥石・硯・礪臼・石鏃）、木製品（漆器・曲物・柱根） 金属製品（古銭・キセル）、縄文土器、土師器、須恵器
調査原因	一般国道 13 号上山バイパス改築事業
調査面積	8 8 4 1 m ²
調査委託者	国土交通省
調査受託者	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
受託期間	平成 1 8 年 4 月 1 日～平成 1 9 年 3 月 3 1 日
現地調査	平成 1 8 年 4 月 2 4 日～平成 1 8 年 1 1 月 1 0 日
調査担当者	調査第一課長 野尻 侃 調査研究主幹 長橋 至 主任調査研究員 小林 圭一 主任調査研究員 榎 綾（調査主任） 調査員 阪 英子 調査員 佐藤 祐輔
調査指導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室
調査協力	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所調査第二課 村山教育事務所 上市市教育委員会



遺跡位置図

1 調査の概要

今回の調査は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の一般国道 13 号上山バイパス改築事業にともなって行われました。遺跡は以前から知られていましたが、山形県教育委員会が実施した中世城館遺跡調査の結果、平成 7 年度に遺跡登録されました。現在まで県教育委員会は、平成 9 年、平成 10 年、平成 15 年に試掘調査を行っています。上市市教育委員会は、平成 13 年に試掘調査、平成 14 年には宅地予定地の調査をし、「上市市埋蔵文化財報告書第 4 号」を作成しています。また上市市は平成 10 年に「中山城



調査区概要図

跡調査会」を組織し、地理、歴史、宗教、文化、自然等について広範な調査を行って、「中山城跡調査報告書」を平成 15 年にまとめました。

戦国時代に築城されたとされる中山城は、上市市の南西端、上山盆地と米沢盆地の間にある山間の細長い平地に位置しており、標高 343.9 m の天守山に築かれた山城です。伊達氏、蒲生氏の支配を経て、1598 年に上杉氏の領地になりました。天守山の頂上には、蒲生氏の時代に築かれたと推測される石積みの物見台のある本曲輪があり、二の曲輪、三の曲輪が良好な状態で残っています。北側を横川、南側を楡沢に挟まれ、東側には標高 282.5 m の前森山と称する小高い山があり、自然の要害を利用した防備です。

中山城が立地する中山地区は、米沢方面と山形方面とを結ぶ交通の要衝にあたり、昭和 32 年に上市市に合併するまでは、東置賜郡中川村（現南陽市）に含まれ、置賜と村山の郡境となっていました。上杉氏の支配になってまもなくの 1600 年（慶長 5）には、関ヶ原合戦に連動した上杉軍と最上軍の戦いで戦場となりました。その後、江戸時代初期は、米沢藩の 5 支城の一つとして、中山城には、上杉氏直属の家臣が配属されて、藩境の防備にあたっていました。1692 年に中山御役屋と改称されて支城体制が変わりました。上杉氏は米沢街道沿いに領境の関所、中山御番所を設置

し、旅人の取り締まりや物質の流出を監視して藩境を警備していました。

調査区域は、曲輪跡と考えられている部分と家中屋敷といわれる上杉家家臣が居住していた武家屋敷跡で、天守山と前森山の狭間にあります。宅地及び畑として利用されていて、最近の生活面と江戸時代の生活面が、ほぼ同じ面であると考えられていました。

1 次調査では、武家屋敷跡のうち、草刈家、西方家、内藤家、岡沢家、次郎兵衛、原田家、下西方家、橋爪家、下大石家、藤本家、上岡田家の跡地を調査しました。また、曲輪跡と言われる旧中山小学校グラウンド直下部分（御役屋の帯曲輪跡）と前森山の北西部分の調査を行いました。

2 次調査の武家屋敷関係では、昨年に続いて下大石家の下層、小中丸家、上大石家、尻高家、昨年北半分を途中まで調査した草刈家、斎藤家の跡地を調査し、道路関係では、次郎兵衛の石積みとそれに面する市道「家中横町線」、藤本家と岡沢家の間の市道「家中横町線」、館坂から中山城跡への登り口の最初の急な S 字型の坂道部分（通称こぶし坂）を調査しました。曲輪跡と言われる部分では、小中丸家と上大石家の南斜面、旧中山小学校グラウンド直下部分(御役屋の帯曲輪跡)の斜面を調査しました。

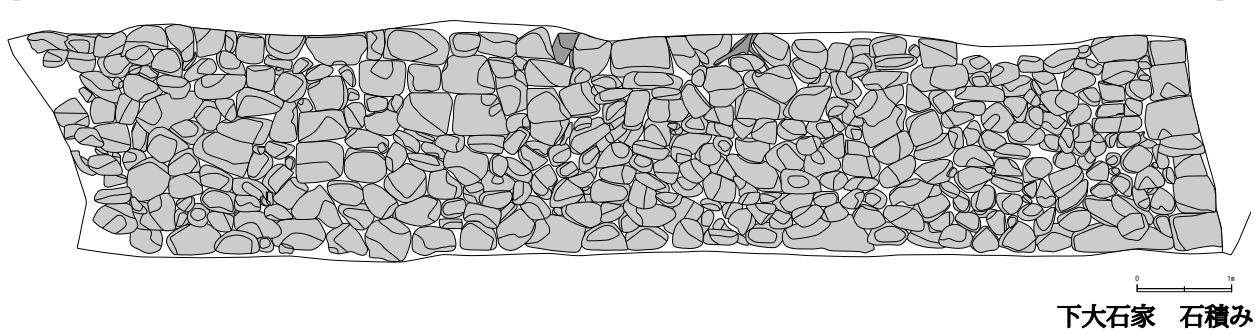
また、調査区南側の楡沢沿岸を、山形県教育委員



下大石家 盛土

所を随所で確認しました。それらの工事は、江戸時代、明治時代からつい最近まで、機会あるごとに行われていたようです。これから整理確認していくことになりますので、概略を以下の表にまとめました。

原田家	横川斜面に盛土
下西方家	中央・北西の整地
橋爪家	整地された全体を、明治時代以降に盛土 2 m以上
下大石家	西側の整地部分を、さらに明治時代以降に盛土
西方家	東側 2/3 を、昭和 50 年代に掘削
岡沢家	北東を盛土 地表は重機による整地
内藤家	南西を盛土 地表は重機による整地
草刈家	全体を盛土 さらに盛土して桑畑 地表は重機による整地
尻高家	コンクリート車庫建設のため掘削
藤本家	地表は重機による整地
上岡田家	地表は重機による整地
小中丸家	西側を削り、南側を盛土
上大石家	西側を削り、東側と南側を盛土
斎藤家	西側を削り、東側と南側を盛土
次郎兵エ	西方家の掘削した土を盛土 地表は重機による整地
五十嵐家	狭く崩落危険のため調査不可 上山市教育委員会の調査実施済み



② 石積み
近年まで、武家屋敷の境界には石積みがありました。

調査区内に残っていたのは、下大石家北側、下大石家西側の市道「家中横町線」に沿った部分、次郎兵エ東側の市道「家中横町線」に沿った部分、斎藤家北側、上大石家の北側 S 字型の坂道部分でした。上山市教育委員会が所有する写真によると、草刈家～内藤家～岡沢家東側の市道「家中横町線」に沿った部分、岡沢家南側で内藤家との境界付近、次郎兵エ東側の北東部分に石積みが確認できます。尻高家東側の市道「家中横町線」に沿った部分にもあったと聞きますが、コンクリート車庫になっており存在していません。

1 次調査では、岡沢家の南側で内藤家の境界付近と原田家の東側に一列に並ぶ石を確認しました。

調査区外では、次郎兵エ北側の一部分（小沼家への登り口）、平塚家東側（丹家との境界）、清水家東側に一部分が残っています。また五十嵐家南側一部分(小沼家への登り口) と大中丸家と中村家の北側にも道路に沿って石積みがあったと聞きますが、現在はコンクリート土手となり存在していません。概略を以下の表にまとめました。



下大石家 石積み (高さ 2.3M)

下大石家北側	調査実施
下大石家西側	調査実施
次郎兵エ東側	調査実施
北東部分は、上山市教育委員会写真	
斎藤家北側	調査実施
上大石家の北側	調査実施（最近の石積み）
岡沢家の南側	上山市教育委員会写真 土台は調査
原田家の東側	土台は調査
次郎兵エ北側	記録
平塚家東側	記録
草刈家東側	上山市教育委員会写真
内藤家東側	上山市教育委員会写真
岡沢家東側	上山市教育委員会写真
清水家東側	一部存在
五十嵐家南側	消失
大中丸家北側	消失
中村家北側	消失

これらの石積みは、武家屋敷跡ということで、江戸時代に築かれたと言われています。2 次調査の結果、すべて江戸時代からの石積みとすることはできないことが確認されました。

上大石家の S 字型の坂道部分の石積みは、坂道（通称こぶし坂）を調査する時に調べた結果、石積みの下から麻袋が出てきて、最近のものであることが明らかになりました。

下大石家西側石積みはしっかりとした組み方で、切った石のようで、明らかに新しい造りでした。1 次調査では、北西部の角部分で高さ約 2.3 m、現在の道路から 1.3 m 下まで続いていることが確認していましたが、2 次調査の結果、家中横町線も深さ約 1.3 m に昔の道路が確認され、道路が盛土されていったことと下大石家の下層約 0.5 m にかつての生活面と後に述べる漆濾しの布が見つかったことから、下大石家西側石積みは、明治になってから構築されたものではないかと推測します。また石積みの裏から近年の碎石を確認し、石積みを組み直したことがうかがえます。

下大石家の北側石積みは、地表に出ている面が高さ約 1 m でしたが、橋爪家の下層調査にともなって調べた結果、高さ約 2.4 m になりました。下大石家の下層に漆濾しの布が見つかった生活面の層があることなどから、一気にこの高さまで石を積んだのではなく、最初に低い石積みがあり、橋爪家が家中屋敷を離れた

後に、家中横町線のかさ上げや橋爪家の埋め立てなどで、下大石家の石積みもかさ上げていったのではないかと推測できます。橋爪家の埋め立て時期は、明治時代に転出したとされることと、出土する型紙摺の磁器から明治時代ではないかと推測しています。

また、上山市教育委員会が平成 13 年に行った岡沢家石積み部分の試掘では、耕作土を切って石積みが構築されているとしています。このことからすべて江戸時代からの石積みとするのは無理がありそうです。

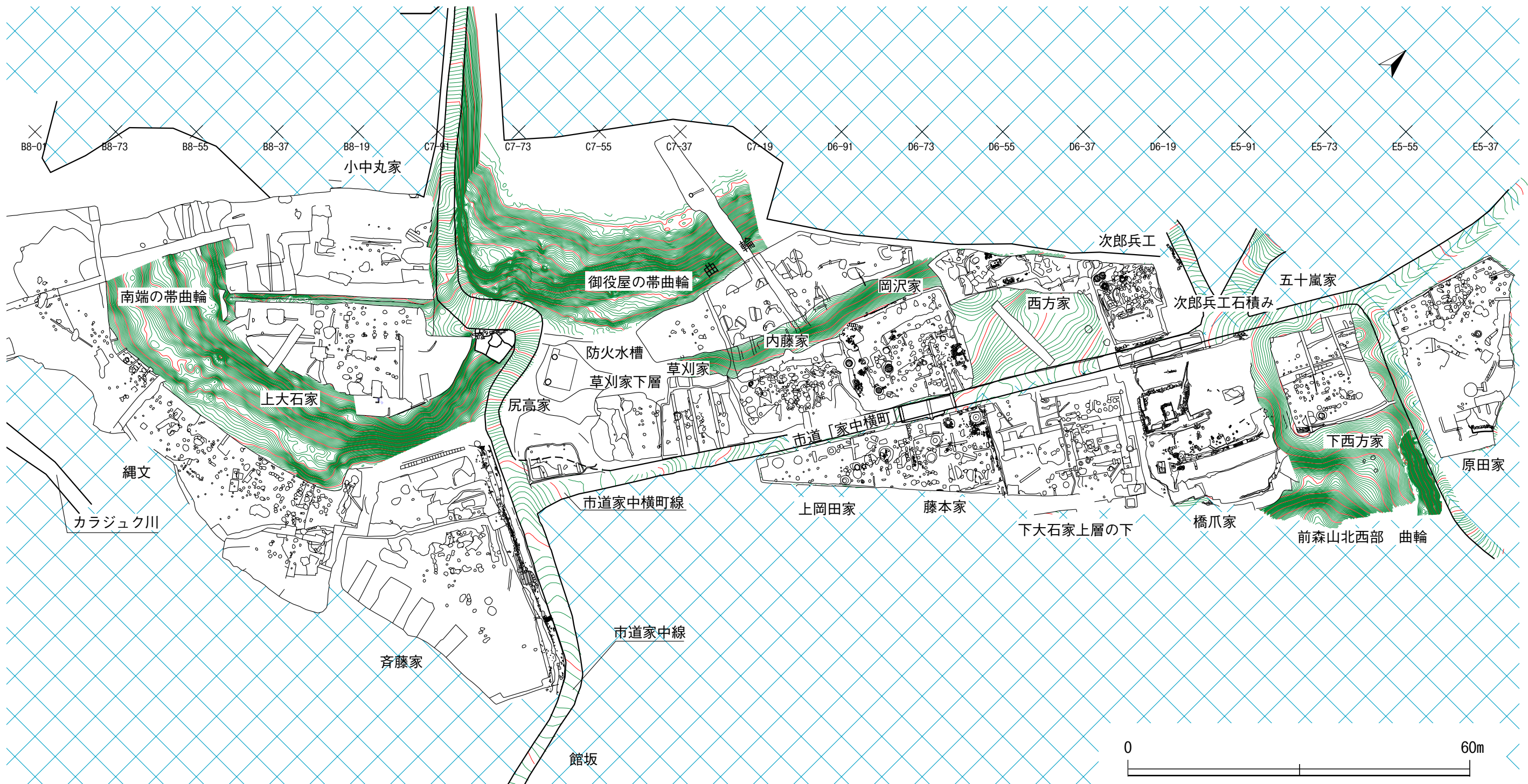
しかし、岡沢家や内藤家などの跡地では、以前の土地所有者が、重機を自ら運転して表土を整地しており、これによって石積みが動いていることも十分考えられます。また、丹家に伝わる文書には、平塚家が書いた「石垣破損についての覚」1830 年（文政 13）が存在しており、平塚家東側（丹家との境界）は幕末から続く石積みであることは間違いありません。岡沢家南側で内藤家との境界付近の石積みと考えられる土台石の部分から、18 世紀以降の生産と考えられる陶器が出土しています。明治時代以降武家屋敷が 24 家の内、少なくとも 13 家が明治時代中に家中屋敷から離れていき、7 家に減っていきます。これら 4 つの理由から、すべて明治以降の石積みとするのも無理があると考えます。

なお、上の部分しか見えていなかった次郎兵エ東側の市道「家中横町線」に沿った石積みは、高さ約 1.6 m であったことを 2 次調査で確認し、昔の道路を盛土していく度に、石積みが埋まっていったことがわかりました。



家中石垣

③ 杉の生垣
地元古老からの話では、中山地区に杉の生垣があるのは、平塚家、岡田家、斎藤家の 3 家のみであり、家中地区に上杉氏直属の家臣が配属され、武家屋敷が形成されてきた頃と密接な関係があるのではないかと



遺構配置図

会が平成 18 年 3 月に試掘し、縄文土器が出土したため、この一帯が 2 次調査の調査範囲に追加されました。追加された縄文調査区の東端は斎藤家と隣接しております。

山形県埋蔵文化財センターによる 2 次調査は、平成 18 年 4 月 24 日から開始しました。今年度も、表土除去で出る残土は調査区外への搬出が困難なために、調査区内を移動する方法を取りました。各武家屋敷や曲輪跡を調査区に設定し、重機による表土除去後

は、ジョレン等の道具による面整理、遺構の検出、5 m 方眼座標の設定を行い、地層断面や遺構平面のデジタル測量による記録、写真撮影、遺物の取り上げなどを行いました。調査終了箇所については、国道 13 号上山バイパス改築事業の進捗にあわせて、順次、工業者に引き渡しており、11 月 10 日までは調査を終了することになっています。

2 遺構について

1 次 2 次両調査区内には、上杉家家臣 24 家のうち 15 家が置かれています。検出された遺構は、武家屋敷跡の石積み、掘立柱建物跡、礎石建物跡、土坑、井戸跡、溝跡、埋設桶遺構、柱穴跡、墓跡などがあり、現在整理中のため確定ではありませんが、1 次調査で判明している遺構数は以下の表のとおりです。2 次調査については、調査中ですので、未集計です。

・掘立柱建物跡・礎石建物跡 6 棟

・土坑	3 9 基
・井戸跡	1 7 基
・溝跡	8 条
・埋設桶遺構	1 4 基
・性格不明遺構	5 9 基

① 整地・盛土

1 次 2 次両調査から、武家屋敷跡については、傾斜地を削り、低いところを埋め立てて整地している箇所

は、天保6年（1835）の棟札があり、最近まで何回も増築されているそうですが、一部柱は礎石の上にのせてありました。下大石家の建物も、現御当主が、明治時代以降の建物ではないかと証言されている増築部分以外からは、栗石を固めて敷いた礎石が検出しており、礎石建物でした。調査区外の平塚家も現在の建物に建て替え前は、礎石建物であったと現御当主は証言されています。中村家の建物も増築されているものの、古い柱は礎石の上にのせてあるということです。これらのことから、幕末から明治時代の家中屋敷は、ほとんどが礎石建物になっていたのではないかと推測できます。

1次調査と2次調査で、礎石建物跡が明確に残っているのは、草刈家のみで、明治時代に廃棄された建物跡と考えられます。上大石家は、幕末の礎石建物を何度か増築したもので、この度の移転で、礎石建物跡については、明確に記録することはできませんでした。ただし下層からは掘立柱建物跡が検出されました。下大石家上層の礎石についても、移転時の整備で消失していたものもありましたが、相当数を記録しました。下層からは掘立柱建物跡が検出されました。家中屋敷建物跡の概略を以下の表にまとめました。

原田家	上層	明治9年の棟札
	下層	掘立柱建物跡
下西方家	上層	水田？ 不明確
	下層	掘立柱建物跡
橋爪家	上層	礎石建物の小屋が2面
	下層	不明確
下大石家	上層	礎石建物跡
	下層	不明確
	3層	掘立柱建物跡



草刈家 礎石建物

西方家	重機掘削で消失	
岡沢家	上層	重機による整地
	下層	掘立柱建物跡
内藤家	上層	重機による整地
	下層	掘立柱建物跡
草刈家	上層	桑畑
	下層	礎石建物跡
	3層	？
尻高家	上層	コンクリート車庫
	下層	整地
藤本家	上層	重機による整地
	下層	掘立柱建物跡
上岡田家	上層	重機による整地
	下層	掘立柱建物跡
小中丸家	上層	数回の建て替え
	下層	不明確
上大石家	上層	礎石建物跡
	下層	掘立柱建物跡
斎藤家	上層	不明確
	下層	掘立柱建物跡
次郎兵衛	上層	重機による整地
	下層	掘立柱建物跡
五十嵐家	狭く崩落危険のため調査不可	
	上山市教育委員会の調査実施済み	

⑦ 井戸跡
井戸跡は、素掘り、円形の石組み、四方形の石組み、縦板横棧隅柱の4形態が確認されました。調査区内の武家屋敷跡で、井戸跡を確認できなかったのは、原田家、下西方家、岡沢家、草刈家、小中丸家、斎藤家です。原田家については、後の住人から、調査区外にあったことを聞いています。水が枯れて権現様近くの清



草刈家 礎石



下大石家 円形石組井戸



藤本家 四方形の石組み井戸

水を汲みに行かなければならず、苦労されたことを伺っております。岡沢家については、西方家の西に多数の井戸、水場遺構が見つかったので、そこが水源なのかもしれません。草刈家に関しては、南に水路が検出されました。小中丸家については、南の土手の下の清水が水源だったことを、地元住民から聞いております。これは、中山小学校が昭和32年に創立したときに当初、子供たちが汲みに来ていた清水とも聞いております。斎藤家は、西側土手に横穴があり、そこが水源と聞いていますが、南側に隣接する縄文東端土手際に浅い石組みが見つかりました。



岡崎家 埋設桶



藤本家 縦板横棧隅柱井戸



藤本家 素掘り井戸

⑧ 埋設桶遺構
埋設桶遺構は、1次調査では、直径約1m弱の桶が14基埋設されているのを確認しました。厠跡ではないかと推定した9基の土壌を理化学分析しました。寄生虫卵分析の結果、明確に厠と断定できるものはありませんでした。このため2次調査では、地元の住民の証言から、人糞を肥料とするために蓄えておいた桶（肥溜め）と最近までのトイレとして使用していたコンクリートの便槽の土壌を採取し、1次調査の結果と比較し、肥溜めの可能性をさぐりたいと考えています。

⑨ 溝跡
溝跡は、1次調査では旧中山小学校グラウンド直下部分の平坦地（御役屋の帯曲輪跡）、内藤家、岡沢家、西方家の上、次郎兵衛、藤本家、橋爪家、下西方家から検出しました。2次調査では、旧中山小学校グラウンド直下部分（御役屋の帯曲輪跡）の斜面、草刈家南側、尻高家、下大石家と橋爪家、小中丸家と上大石家との南斜面曲輪跡から検出しました。

下大石家と橋爪家の溝については、下大石家から

御指摘を受けました。材木用の杉に比べて、生垣の杉は、極めて成長が遅いのだそうです。現平塚家御当主も、幼少の頃と杉生垣はまったく変わっていないと、成長の遅さを証言しています。現調査区内の斎藤家には、34本の杉の切り株を確認し、数本をサンプルとして持ち帰り、分析を依頼することにします。

④ 石段跡

調査区外の中村家の入り口には、現在も使用中の石段があり、昔からのものだと言われている。江戸時代から使用されていた石段と推測します。また現存はしていませんが、大丸家にも同じような石段があったと、現在の住人から聞きました。これらと同じ並びで、小丸家から、石の並びが見つ



小丸家 石段

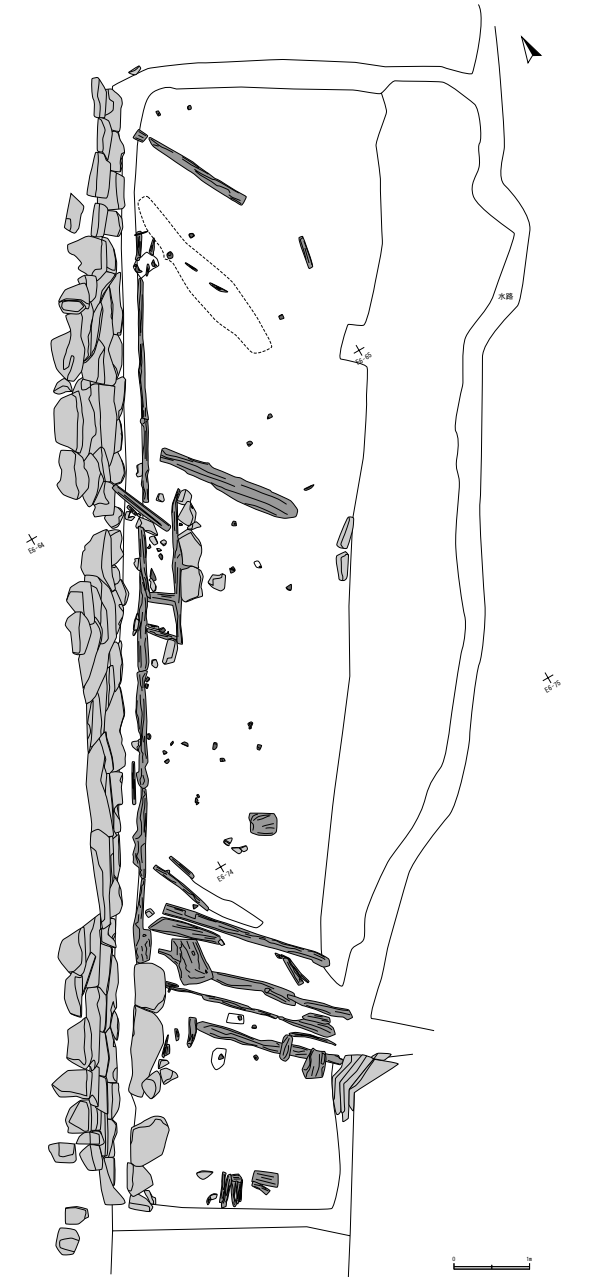


市道「家中横町線」

かり、屋敷入り口の石段と推測しています。また、斎藤家からは、屋敷入り口に下っていく石段が見つっています。これは、斎藤氏がかつて使用していた石段と複数の地元古老から聞きました。江戸時代からのものは、今のところ断定できません。調査区外ですが、平塚家にも対の石柱が現存しており、かつての入り口で段差になっていたと、現御当主から伺いました。

⑤ 道路跡

市道「家中横町線」は、江戸時代からの道路で、かつて現道よりずっと狭かったと言われている。2次調査では、次郎兵衛東側石積みに沿う「家中横町線」、藤本家と岡沢家の間の「家中横町線」を調べました。



市道「家中横町線」

次郎兵衛東側石積みに沿う市道では、下層のアスファルト道路を外すと、石積みに沿って石で土留めされた昔の水路が出てきました。さらにその下から、木材で土留めをした水路と水場遺構が確認され、多数の近世陶磁器や真鍮の卸金、包丁などが出土しました。土留めを取り除いた最下層の道路は、幅約1.2～2.0mで、道の両側に側溝が確認されました。この部分の道路は、下大石家前が、北から南へ上り坂だった所で、先に述べましたように昔の道路を盛土していく度に、石積み埋まっていったことがわかり、道路の南壁で深さ約1.4mになりました。

藤本家と岡沢家の間の市道について、現道アスファルトは、岡沢家石積みを壊した部分に拡幅して造られており、下層のアスファルトの西側の側溝には、簡易水道が埋設されていることがわかりました。東側には側溝は確認できませんが、道幅は、轍の跡から約1mを超える程度と考えられます。

2次調査では、中村家御当主の証言に基づいて、館坂から中山城跡への登り口の最初の急なS字型の坂道部分（通称こぶし坂）を調査しました。その結果、



斎藤家 掘立柱建物跡



下大石家 根固石

石で土留めをした、かつての道が出てまいりました。昭和32年創立の中山小学校造成時に、現在の広いS字型の道路にするまで使用されていたそうです。

⑥ 掘立柱建物・礎石建物

掘立柱建物とは、柱を直接地面に埋めて構築した建物で、柔らかい地面の場合は柱穴の底に扁平な石を置いて礎盤にしたり、柱の根元を石で根固めしたりする場合もあります。

礎石建物とは、柱を礎石の上に置いて構築した建物で、古くは役所の重要な建物や寺院などに用いられました。近世になると、川原石などを礎石とした建物が多くなるようです。礎石の下には栗石と呼ばれる川原石が敷かれ、礎石の面調整を行いました。

最近までの家中屋敷や中山地区の建物の土台の様子を、複数の地元の方から聞いてみると、現在の家に建て替える前は、柱は地面には埋めないで、大きい平らな礎石の上にのせた柱で構築された建物ということです。昨年移転するために壊された上大石家の土台も礎石の上に柱がのせてありました。上大石家の建物



斎藤家 礎盤



下大石家 掘立柱

陶磁器の器種は、碗、皿、小杯、鉢、播鉢、瓶、水滴、猪口、香炉、火入、仏飯器、壺、戸車などがあり、特に碗と皿が特に多いです。よく目立つものとして播鉢も多数あります。

1次調査で注目するものは、岡沢家から出土した磁器の底部に付着したと思われる朱色の皮膜物質、草刈家から出土した磁器に入った朱色物質、橋爪家から出土した磁器の底部にたまった塊、岡沢家と草刈家から出土した捻った朱色物質でした。

理化学分析の結果、皮膜物質はベンガラを混ぜた赤漆、朱色物質はベンガラ（赤鉄鉱）であり、底部にたまった塊は樹脂（漆）と考えられ、捻った物質は、格子状に編まれた布にベンガラを混ぜた赤漆が染み込んでいることがわかり、これは漆を塗る前に濾すために使用したもののようです。漆塗りでは、陶磁器の底部のくぼみをパレットとして使用していたと聞きますので、これらのことから、家中屋敷で漆塗りが行われていたと伝えられていることを、裏付けることになり



朱色物質



内耳鍋

ます。

2次調査でも漆濾しの布は、小中丸家、上大石家、斎藤家から出土しています。特に小中丸家の漆濾しの布は、黒漆ですので、間違いなく黒漆かどうかを理化学分析して確かめることにします。

瓦は黒瓦の一部で、1次調査で岡沢家からのみ出土しました。赤瓦の出土は、1次では確認できていません。2次調査でも今のところ瓦は確認できていません。

木製品は、漆器、ヘラ、杭、捏鉢、柱根、桶、つるべ桶、文字のある板、柱などがあります。

珍しいものとして、1次調査では上顎用の木製漆塗り総義歯が、橋爪家から出土しました。右上の糸切り歯が残っていたようで、その部分は空いています。義歯に関しては、同じ上杉領内の白鷹町鮎貝役屋の幕末の下級武士の日記「小嶋家文書 俊親日記四 白鷹町教育委員会」に記述があります。

橋爪家からは、樋も出土しています。これらは、型紙摺の染付やホヤ（石油ランプのか？）のようなガラス片も一緒に出土していることから、江戸時代末から明治期のものではないかと考えられます。漆器も多数見つかっています。内職の漆塗り伝製品と同じ型の漆器もありました。また家紋入りの漆器（碗）も出土



橋爪家盛土と型紙染付（下）

しています。

銭貨は、1次調査で58枚出土し、2次調査でも数十枚出土しています。1次調査の銭貨のうち49枚が江戸時代以前の銭で、5枚が戦前、2枚が現行、残り2枚は銭と思われる金属です。江戸時代以前の銭のほとんどが寛永通宝で、あとは文久永宝が1枚、永楽通宝が1枚、元豊通宝が2枚出土しています。

金属製品には、キセル、^{かんざし}簪、鉄砲玉と考えられる鉄球、包丁、小柄、灰ならし、角釘、鎌、その他現在までの日用雑貨が出土しました。

石製品は、^{ひきうす}碾臼、硯、砥石、五輪塔の一部、縄文時代の石匙が出土しました。

② 縄文調査区

縄文土器は、前期初めから晩期前半までの様々な時期のものが小さな破片で出土していますが、その中でも多く出土しているのは前期初頭と前期後半の土器です。最も注目される土器は、全形が復元できる縄文時代前期後半の土器（大木5式：約6,000年前）で、



縄文時代前期後半の土器



平安時代の須恵器

縄文クッキーなどで有名な高島町にある押出遺跡（大木4式）の次に来る時期の土器です。この時期の土器は、山形県内ではあまり出土しておらず、大きな集落であった押出遺跡に住んでいた人々が、その後どこに移り住んだかを考える上で、非常に重要な資料となりました。石器は、石鏃や石錐・石棒のほかに石器を作る時にできるフレイクが数点出土しています。

平安時代の遺物は、比較的狭い範囲から出土しています。注目されるのは石で囲った屋外炉です。炉の中の焼土からは、熱を受けた土師器が出土しています。焼土のフローテーション作業（水洗選別）を行ったところ、炭化したクリなどが見つかり、当時の人々の食生活なども分かりました。また、炉のすぐ近くからは須恵器の坏が2つ重なった状態で出土し、その2つの須恵器の間には植物質の薄い膜が挟まっていた。どのようにして須恵器が使われたのか、また屋外炉との関係など非常に興味深い出土の仕方をしています。

4 まとめ

1次調査では、江戸時代武家屋敷の生活面がある程度残されていると想定して調査を進めましたが、予想以上に重機による開発が進んでいることがわかりました。2次調査では武家屋敷全体にわたって、江戸時代から明治時代そして現在まで、機会があれば重機のあるなしにかかわらず、整地・掘削・盛土等、大小の開発が行われていたと見ることができました。一般国道13号上山バイパス改築事業も大きな流れでみれば、家中屋敷の変化の一つなのでしょう。

家中屋敷といわれる上杉家家臣24家の武家屋敷配置図は、故保科文夫氏（上大石家の出）が調べた屋敷配置を、加藤和徳氏が作成した中山城縄張り図にあてはめたものです。調査を進めるうちに、その配置を検証することが重要な課題として浮かび上がってきました。

また、江戸時代から明治時代そして現在まで、整地・掘削・盛土等の開発が行われていました。各武家屋敷のどの面が、上杉家家臣15家の武家屋敷なのかもできるだけ明らかにしていく必要も出てまいりました。

縄文調査区には、縄文時代前期初頭に人々が最初に訪れ、晩期前半まで断続的に生活していたことがわかります。しかし、遺物の出土量が少ないことや竪穴住居跡などが見つからないことを考えると、この場所に定住していたのではなく、短期間周辺の山々などで狩猟・採集を行う際に、一時的なキャンプ地とし

橋爪家を経て下西方家につながるものがほぼ確認でき、削られる前の前森山山裾に沿っていた可能性があります。

⑩ 曲輪跡

1次調査の草刈家から西方家西側の一段高い部分、つまり旧中山小学校グラウンド直下部分（御役屋の帯曲輪跡）は、上層が重機によって整地攪乱されており、最近の樹木痕多数と1m下からも重機の爪痕が見つかりました。西縁は重機による整地のすぐ下が地山ですが、東縁の部分は下層部分が近世陶磁器の出土する層で、岸窯産の香炉も見つかっていることから、平坦にする整地が行われていたと思われます。また溝跡も見つかっていますが、ビニル製品が底から出土しており、内藤家地に昭和30年代まで住まわれていた方の証言からも、その家が使用していた水路とみられます。

1次調査の前森山の北西部分には、調査区内から4段の平坦地が確認されました。しかし隣接する橋爪家は2m以上の盛土で、その下からは型紙摺の染付が見つかっており、前森山を明治時代以降に削って盛土にしたものと考えられます。このことから、前森山全体から北西部分の曲輪の形状を考える必要があり、4段の平坦地すべてが、中世からの曲輪跡であるとは結論付けられません。

2次調査の小中丸家と上大石家の南斜面、旧中山小学校グラウンド直下部分（御役屋の帯曲輪跡）の斜面を調査しました。旧中山小学校グラウンド部分は、昭和32年の創立時に、ブルドーザーで整地していたと、地元の住民の証言を得ています。東側の縁は2m以上の盛土となっていることを確認しました。斜面の



帯曲輪跡

溝については、地元の住民の証言から、かつての道の可能性もあります。

2次調査の小中丸家と上大石家の南斜面曲輪跡は、3段の平坦地があり、斜面を削りその土砂で盛土している「切岸」が確認されました。一番上の平坦地には、西から東に傾斜する溝があり、溝の中からは、遺物が確認されないため、いつの時代の遺構かはっきりしません。可能性として、空堀か楡沢上流から家中地区に引いてきていた水路の可能性があります。また、下から一段目と二段目の間の傾斜面から、墓跡を確認しました。直径約0.8m、深さ0.4mで、六文銭、頭骨などの骨、歯が出土しました。人骨、歯の正式な分析は、これから行いますが、歯科医師によれば、歯は間違いなく人のものであるということです。一緒に近世陶磁器が出土しているため、江戸時代の墓と考えられます。

⑪ 縄文調査区

縄文時代調査区は、中山地区を東西に走る楡沢が形成する谷筋の一角に位置し、北側には天守山から続く急斜面を利用した南端の帯曲輪が迫っています。



縄文調査区全景



縄文調査区 屋外炉

主な出土遺物は、縄文時代の土器や石器、平安時代の土師器や須恵器などです。遺物は全体で広く出土していますが、調査区西側に遺物の最も多く出土する層が広がっていることが確認できました。

縄文時代の遺構としては、石組みや縦長の土坑・ピット群・落ち込み状の遺構が確認されていますが、住居跡などは検出されませんでした。調査区東側で検出された小さなピットからは縄文土器と共に炭化したクリが大量に出土しました。また、調査区西側から平安時代の屋外炉、調査区東側では縄文時代のもではありませんが、建物の柱穴群が検出されています。



3 遺物について

① 武家屋敷、曲輪の調査区

出土遺物は、中近世から現代に生産されたとみられる陶磁器と瓦、同時期の木製品、古銭、金属製品、石製品が多量に出土しています。1次調査で出土した中近世陶磁器の破片総数は、11,337個でほとんどが近世陶磁器でした。各武家屋敷の数は以下の表の通りです。圧倒的に橋爪家からの出土が多いです。また、2次調査では草刈家南側から多数の近世陶磁器が出土しています。また縄文調査区からも多量の土器が見つかります。

御役屋の帯曲輪跡	561
西方家	511
次郎兵衛	858
草刈家	795

内藤家	1,268
岡沢家	1,526
原田家	997
下西方家	203
前森山北西部曲輪	125
橋爪家（1次調査）	2,896
橋爪家（2次調査）	942
下大石家	883
藤本家・上岡田家	417
縄文調査区 陶磁器	582
縄文調査区 土器	1,294
調査区内	297

一部中世末にさかのぼる中国製磁器や瀬戸美濃の陶器が出土しています。中国製品は、16世紀の景德鎮窯、龍泉窯の磁器です。珍しいものでは、草刈家から出土した唐津皿屋窯の四角釉はぎの皿（1580～1590）があります。また2次調査では、伊達氏と深いかわりのある内耳鍋が、斎藤家の南側に当たる縄文調査区東端から出土しました。

江戸時代のものでは、古いもので17世紀の肥前陶磁器がありますが、大多数が18世紀から19世紀の肥前、肥前系で、19世紀の幕末から明治にかけては、瀬戸美濃の磁器も出土しています。その他、近隣の東北地方の窯で製造されたとみられる陶磁器（在地系）が極めて大量に出土しています。在地系には、岸窯、大堀相馬焼、成島焼があります。整理中のため、はっきりと確認はできていませんが会津地方の窯、置賜地方の戸長里焼と成島焼、山形市の平清水焼が含まれていることも間違いないでしょう。また宮城県の切込焼と考えられる磁器も多数確認されています。



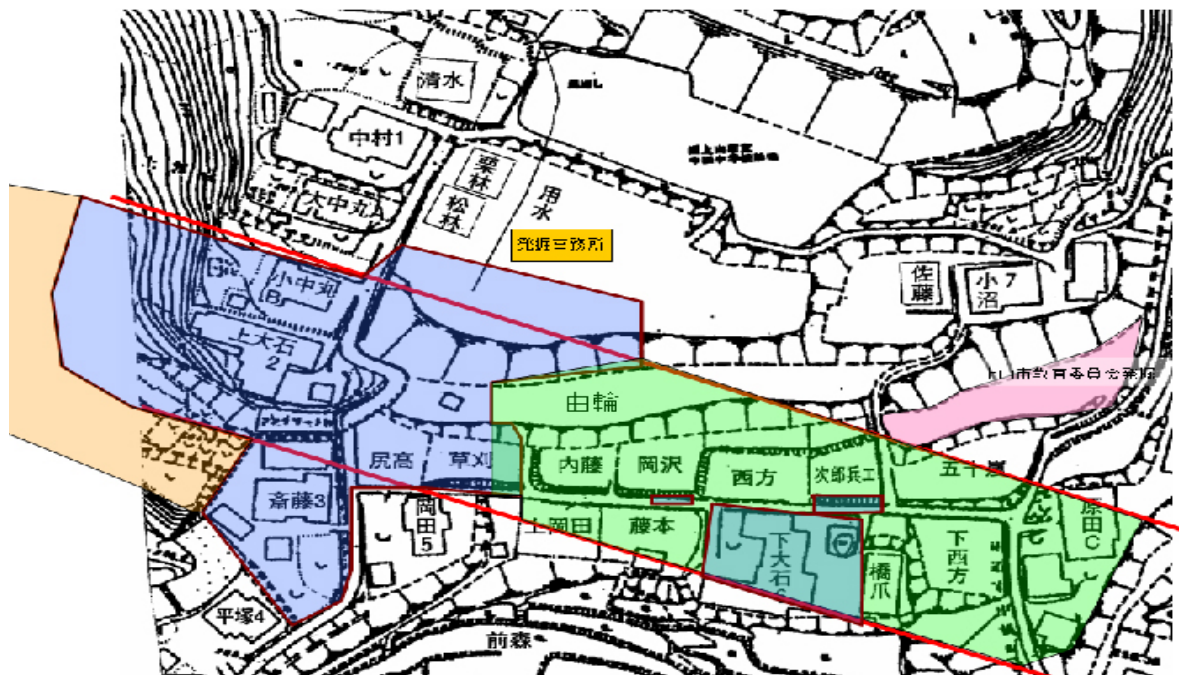
唐津皿屋窯

て使った場所と考えられます。その後、長い間この場所は人々が訪れませんでした。が、平安時代になると屋外炉を使った生活が一時的に行われていたと考えられます。

最後に、2年間にわたる調査にあたって、ご協力をいただいた関係機関や地元の皆様、各業者様、また猛暑や雨天の中にもかかわらず作業に従事していただいた作業員の方々に深く感謝申し上げます。

貴重な資料をご提供下された方々、現場まで足を運んでいただいて、家中地区の昔の様子をお話し下

された方々、発掘方法や遺物についてのご教示をして下された方々に、心より御礼申し上げます。



家中屋敷配置図



調査区全景



作業員集合写真



作業風景